

宗久 三枝松 宗及 長岡玄旨 羽柴筑前守殿 羽柴出羽守殿 富田左近殿 羽柴監物殿

津田隼人殿 羽柴左衛門殿 卷村兵大夫殿

天正十五年

〔長闇堂記〕一我茶湯を仕初し時を思ふに、北野の大茶湯の年に當れり、大茶湯を考ふれば、天正十五年十月朔日なり、秀吉公八月二日に高札を五畿七道に打せられ給ひて、都鄙の茶湯に志せるもの、松原に於てかこふべしとの上意なりし、南都より東大寺、興福寺、禰宜町方合三十六人、幼年なれども、此道すけるまゝ、見物のため同道して覺候事をしるせり、聖廟前はよし垣ありて、東口より西口へ出入あり、上様御かこひ四ツ、禮堂の隅を品々にかこはせ、秀吉公、宗易、宗及、宗見四人の御手前也、各御道具の記ろくあり、大和大納言殿○豊臣秀長は西門筋西側にして、郡山武家衆、其次南都寺社町方なり、松原中のかこひ、思ひく品々有、中にも覺へて侍りしは、引退小松原有所に、美濃の國の一人、芝より草ふきあげ、内二帖敷間中四方砂まき、一帖敷のこる所瓦にて、ふちく爐に釜かけ、通ひ口の内に主人居て、垣に柄杓かけ、瓶子のふた茶碗に丸服部を入れて、それにこがしを用意せり、扱晦日に御觸有て、朔日曉天より御社の東口にてくじ取、五人組にして四ツ御座敷にて御茶被下候、御西の口へすぐに立出ごとくにして、數百人の御數寄朝九○九恐誤字過に相濟なり、扱御膳過晝前より御出有て、一所も不殘御覽せし時、か的美濃の國の人、其名は一作、松葉をかこひの脇にてふすべ、其烟立上りしが、秀吉公右より御口のよしにて、一服と御意あれば、そのこがしを上奉る、御機嫌殊勝にして、御手に持せられし白の扇を拜領して、今日一の冥加とぞいひし、又經堂の東の方、京衆の末にあたりて、へちくわんと云し者、一間半の大傘を朱ぬりにし、柄も七尺計にして二尺程間をおき、よしがきにてかこひし、照日にかの朱傘かゝやきわたり人の目を驚せり、是も一入輿に入らせ給ひて、則諸役御免を下され、八ッ者○八ッ者蓋誤字には皆々御暇被